

仮名書道教育の実践から考える万葉仮名の教材の可能性

——奈良市立東登美ヶ丘小学校との連携を通して——

北山 聡佳

橋本 昭典

はじめに

稿者は、前稿「書道の芸術性と実用性」初探―「墨書四面木簡」の制作から―において、木簡上の書字にみる書道の芸術性と実用性について検証し、木簡を題材とした教育実践における現状批判のうえに、今後の教材的可能性について初步的な考察をおこなった。

通常木簡ではなく整形木簡という特別な素材に文字を書くときの意識のはたらきや、文字としての実用から芸術への転回について、一般向けのワークショップと、大学での授業における実践から明らかにした¹⁾。前稿での論証のよりどころとなった「木簡の名刺を作ってみよう」ワークショップを含む教育実践はさいわい好評をもつて

迎えられた。本稿にて考察の対象とする、小学校での教育実践もまた、その一連の活動の一つである。前回同様、北山・橋本と奈良教育大学仮名書道研究室（指導教員北山、仮名書道を専門に研究しているゼミ）所属の学生らによりおこなうことができたが、今回は児童約百人を対象とする点でこれまでとは異なるものとなった。前稿での検証と課題を踏まえ、まだあまり積極的には研究がなされていない書字時の意識について検証し、書道教育におけるさらなる成果や課題を得た。加えて本稿では、そこから顕在化した、小学生の書字時の意識と、書字動作の特質から、仮名文字を教材とすることの効果についても考察する。この点に注目した仮名書道の小学校における実践報告はなく、小筆指導に特化した書字行為に関する研究もまた進んでいない実状があり、本稿ではその双方に関する考察を試み、小学生の書字行為に関する指導の新たな視点を提示したい。

1 奈良市立東登美ヶ丘小学校における教育実践の概要

本実践は、奈良市立東登美ヶ丘小学校（以下、東登美ヶ丘小学校とする）における複数回にわたる総合的な学習の時間に設定された、墨（主に「奈良墨」）をテーマとした活動の一環に協力したものである。

東登美ヶ丘小学校は、奈良市の北西部に位置し、学校教育目標に「自ら学び、豊かな心を持ち、よりよい社会を創る児童の育成」を掲げ、ESDの推進にも力を入れており、地域社会に目を向けた教育をしている。そのような教育環境のもと、地域の特性を活かして、「奈良墨」の学習を継続的におこなっている。奈良県では、伝統産業として墨の製造が盛んであり、近年は国内の九十五パーセントのシェアを誇り⁽²⁾、いわゆる「奈良墨」と呼ばれ、親しまれている。

東登美ヶ丘小学校では、ESDの学習のため、総合的な学習の時間に、「奈良墨」を題材とした単元を設定し、約二か月かけて学習させる構想をしていた。本単元での目標として、「当事者意識をもつて社会問題に関わろうとする態度の育成。」⁽³⁾、「他の社会問題に対しても同様に動くことで解決・改善につながるという意識の育成。」を掲げており、「奈良墨」を題材として伝統産業や伝統文化について学び、それらにかかわる体験をすることで、実態や課題を知り、さらにその持続可能性について考えさせることを目的としていた。

その単元の導入として、「奈良墨」や固形墨を使うという体験および、特別なもの（木簡）に「奈良墨」で書くという体験をさせる

ため、稿者らが授業をおこなうこととなった。

まず、二〇二三年九月四日、北山・橋本と奈良教育大学仮名書道研究室所属の学生十六名（日本人学生および留学生）による「木簡の名刺を作ってみよう」という題目の講義と実技指導の活動に始まる。これが第一回で、第二回は北山と学生二名による墨についての講義、最終回となる第三回は北山・橋本と学生八名が参加し、児童らによる学習のまとめ（プレゼンテーション）とそれに対する総評をおこなった。これら一連の活動は、すべて東登美ヶ丘小学校にておこなわれた。本学の教員と学生がかかわったのは、この三回のみであるが、東登美ヶ丘小学校では、この三回以外に、地元の製墨業者に学ぶ活動や調べ学習などを通して、長期にわたって墨の学習を継続している。そのため、「奈良墨」に関する学習の一環となるよう意識し、児童らに「奈良墨」を使う意義を考えさせるための検討をおこなった。よって三回の内容をこのような構成とした。

2 小学校国語科書写用教科書の現状と「奈良墨」の学習

現行（二〇二三年度）の小学校国語科書写の教科書においても、高等学校芸術科書道の教科書にあるような、文房四宝や伝統文化、伝統産業についての内容の掲載が目立つ。例えば、現行の教科書は五社の出版社によるが⁽³⁾、学校図書によるものでは、学年ごとに各筆記用具用材の製造過程について掲載している。三年生用の教科書では墨を取りあげており、文房四宝への意識づけが見える⁽⁴⁾。教育

出版による教科書では、五年生で墨、硯、紙の製造過程を一頁にまとめて掲載している⁽⁵⁾。光村図書の教科書でも、四年生用で一頁にまとめて紙、墨、硯について掲載する⁽⁶⁾。さらに、東京書籍による三年生用の教科書では、製造過程だけではなく、筆、和紙、硯、墨のそれぞれの有名な産地も併記し、墨では奈良市の「奈良墨」をあげている⁽⁷⁾。また、この教科書では、広島県安芸郡熊野町の筆作り職人の顔写真も掲載し、「筆作りにこめた思い」という文章とともに同一頁内に掲載する⁽⁸⁾。

用具用材の製造過程だけではなく、産地や職人という固有の内容が書写の教科書に含まれるのは特徴的である。いわゆる「筆墨硯紙」の順序までを連想させるのは、学校図書による教科書のみであるが（筆の代わりに鉛筆を掲載する⁽⁹⁾）、伝統産業や伝統文化の事項、つまり高等学校芸術科書道につながる内容が小学校書写においても触れられているのが実状である。また、仮名書道に関する内容も例外ではない。毛筆による「いろは歌」や仮名文字の字源を掲載する教科書も複数あるが、それらの変遷の過程を図版で提示するものや、あわせて毛筆による仮名文字の写本を掲載する教科書もある。例えば、特筆すべきは、学校図書による三年生用の教科書には、仮名書道の入門としてよく臨書され、高等学校芸術科書道の現行教科書にも掲載されている「高野切第三種」の写本（部分）が載っており、キャプションには「『古今和歌集』「高野切」」とある⁽¹⁰⁾。そのほか、変体仮名を交えた仮名文字による写本や書状、歌碑等の図版掲載は現行教科書に複数確認できる⁽¹¹⁾。また、日本文教出版による

教科書では、五年生用の教科書において、奈良筆の紹介をしており⁽¹²⁾、同頁に「墨や紙、硯についても調べてみよう」と記載がある⁽¹³⁾。

3 第一回の講義内容の実際と考察

第一回の実践のもととなったのは、一般向けに開いたワークショップ「木簡の名刺を作ってみよう」(図一、二〇二三年三月および二〇二三年五月に実施)である。この二度の実践は、ほぼ同じ準備、同じ内容でおこなった。事前に開催内容を記載したチラシを地域の小学校に配布したり、UZの上や地域の掲示板にポスターを貼ったりして告知をし、対象者に制限を設けることはなかった。実施時間は一回につき一時間程度で、複数日、複数回おこなった。結果とし

図一 二〇二三年(上)および二〇二三年(下)実施のワークショップ案内(主に小学生向け)

木簡の名刺を作ってみよう

「木簡(もっかん)」とは
古く、文字を書くための板に刻みつけていた木の板のことです。

参加材料
① 木簡(もっかん) ② 墨 ③ 硯 ④ 筆 ⑤ 紙 ⑥ 水 ⑦ 筆洗 ⑧ 筆入れ ⑨ 筆削り ⑩ 筆拭き ⑪ 筆置き ⑫ 筆立て ⑬ 筆箱 ⑭ 筆袋 ⑮ 筆筒 ⑯ 筆架 ⑰ 筆洗 ⑱ 筆入れ ⑲ 筆削り ⑳ 筆拭き ㉑ 筆置き ㉒ 筆立て ㉓ 筆箱 ㉔ 筆袋 ㉕ 筆筒 ㉖ 筆架 ㉗ 筆洗 ㉘ 筆入れ ㉙ 筆削り ㉚ 筆拭き ㉛ 筆置き ㉜ 筆立て ㉝ 筆箱 ㉞ 筆袋 ㉟ 筆筒 ㊱ 筆架 ㊲ 筆洗 ㊳ 筆入れ ㊴ 筆削り ㊵ 筆拭き ㊶ 筆置き ㊷ 筆立て ㊸ 筆箱 ㊹ 筆袋 ㊺ 筆筒 ㊻ 筆架 ㊼ 筆洗 ㊽ 筆入れ ㊾ 筆削り ㊿ 筆拭き

活動のねらい
① 木簡(もっかん)の歴史や文化について学ぶ。② 木簡(もっかん)の作り方を学ぶ。③ 木簡(もっかん)の名刺を作る。④ 木簡(もっかん)の名刺を交換する。⑤ 木簡(もっかん)の名刺を展示する。

活動の場所
① 木簡(もっかん)の名刺を作る。② 木簡(もっかん)の名刺を交換する。③ 木簡(もっかん)の名刺を展示する。

活動の時間
① 木簡(もっかん)の名刺を作る。② 木簡(もっかん)の名刺を交換する。③ 木簡(もっかん)の名刺を展示する。

活動の費用
① 木簡(もっかん)の名刺を作る。② 木簡(もっかん)の名刺を交換する。③ 木簡(もっかん)の名刺を展示する。

活動の問い合わせ先
① 木簡(もっかん)の名刺を作る。② 木簡(もっかん)の名刺を交換する。③ 木簡(もっかん)の名刺を展示する。

て、参加者は未就学児から大人までさまざまな年代であった。チラシやポスターによる情報を頼りに訪れた人や、会場前を偶然通りかかって参加したという人もいた。多様な参加者に対し、木簡の名刺を作るにあたって、木簡と名刺の関係性についての講義をおこなうとともに、木簡に墨で文字を書くという特別な体験を提供することができた。木簡と名刺に関することや、実際に出土した木簡に使用された文字（漢字）についての講義は橋本がおこない、体験として実際に書いてもらう仮名文字の歴史についての講義や実技指導は、仮名書道研究室所属学生らがおこなった。北山はそれらの事前指導や全体の構成を担当した。このような二度のワークショップのうち、二〇二三年のものを実施した学生らが本教育実践に参加した。しかし、今回は、小学四年生のみを対象者とする点、体育館にて約百名に講義をするという点、一人の学生が複数の児童らに実技指導をするという点などに加え、総合的な学習の一環であるという点など、これまでとは大きく異なるものであった。そのため、これまでの経験をふまえつつも、新たな工夫を多く要することとなった。

なお、本稿においては仮名書道教育における教材的可能性を論証するため、万葉仮名を題材に含む講義と実技の第一回を考察対象とする。

3-1 書道への興味関心・理解を深める導入部分の工夫

まず、児童らとの顔合わせを含めた導入部分において、書道への

理解を深め、興味関心を引き出すため、その後の橋本による講義、学生らによる授業へスムーズにつながるよう構成を考えた。

学生たちは、「奈良墨」を含めた用具用材や、仮名書道に関する知識を紹介する内容を、冒頭の自己紹介の場面でおこなうこととした。学生たちは三つのグループに分かれ、次のように①から③の順でそれぞれの内容を扱うこととした。

① 文房四宝などの紹介を主とした自己紹介

② 仮名文字（主に平仮名）を用いて書いた、学生らの出身地を主とした自己紹介

③ 仮名文字（女手）を用いて書いた名前を主とした自己紹介

これらの自己紹介によつて、書道から仮名文字、そして仮名書道への理解を深めることができる構成となっている。これらはクイズ形式とし、児童らに楽しんでもらえるよう工夫し練習を重ねた。

対象者が約百人で、体育館での実施であったため、実物の提示では効果的でないものは、その画像をスクリーンに映す形式とした。①では、文房四宝などを、画像を見せながら紹介し、用具用材の種類を簡単に紹介する。大きさや形状の異なる文房四宝を、実物を提示すると同時に、スクリーンにその画像を提示することとした。例えば、紙では、さまざまな料紙の画像を提示して装飾を含めた種類の豊富さを紹介し、実際に実物の条幅を見せ、大きさを説明することとした。仮名文字で名前を書いた条幅作品も準備し、大きさを感じさせる工夫を凝らした。また、軸作品を用意し、表装や印についても紹介することとした。それぞれ、装飾があるものや珍しい形状

図一 仮名文字による「なら」

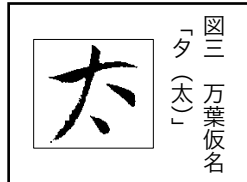


のものを提示するようにし、興味を持たせる用具用材を探した。

②では、仮名文字を扱うクイズとしたが、ここでは平仮名を主に扱う。徐々に造形的な難易度を上げるが、ヒントとして、それぞれの出身県や出身国に関連するものの画像もスクリーンに提示することとした。平仮名を用い、平安時代の女手を想起させるような字形を用いながら、連綿なども取り入れた造形の作品を提示教材とした。

②と③の部分では、仮名文字を実際に見て読むクイズを通して、仮名文字に慣れるとともに、指導学生（本学学生）の紹介をおこなう、親睦を深めることも目的とした。仮名文字で書く内容は、指導学生の出身地（都道府県名または日本国外の場合は国名）や、それぞれの地域に関連する言葉である。さらにそれらの地域に関連する画像をヒントとして提示していく構成である。例えば、兵庫県であれば「あかしやき」という仮名文字やその画像を提示する。奈良県であれば、図二のような「なら」という解答を提示する。仮名文字は「高野切第一種」等から、平仮名に近い平易な造形のもの参考とし、段階的に字形の難易度を上げる工夫をした。とくに②のグループを担当する学生を出身地分布の観点から選び、海外二か国出身の学生を含め、クイズ構成に工夫をした。最後の紹介者を奈良県の学生とし、ここではヒントの画像として「奈良墨」を用い、①を受

図三 万葉仮名「タ（太）」



けて奈良県と墨の関係性を再び意識づける工夫をした。

②における短い単語の仮名文字解読クイズをへて、③の活動は、指導学生のそれぞれの姓名を仮名文字で書いたものを提示し、読ませるクイズとした。このグループは日本人学生のみで構成される。

「高野切第一種」を基調とした女手の、平仮名に近い字形を連綿させながら姓名のみを提示する。はじめに提示するものには、変体仮名は「可」のみを含んだ表記とし、その説明を加え、次にまた別の学生の名前でその「可」を用いる姓名の提示をし、児童らに慣れさせる工夫をした。「す」は字源の「寸」に近い形を提示し、仮名文字が漢字からできているという説明を加えることで、次の講義へつなげるねらいとした。あわせて、この講義につづいておこなう授業の実技にて取りあげる、万葉仮名を用いた姓名の提示も試みることにした。万葉仮名は、その授業の実技で基調とすることとした正倉院文書のうちの「正倉院万葉仮名文書」^{〔4〕}（二種のうち第十一紙、選定理由は後述する）に基づき、このグループの指導学生五名のうち二名の姓名を、万葉仮名を用いて表記した。その際、小学四年生でも想起するのが簡単と考えられる漢字を字源とする万葉仮名を用いた。図三に、そのうちの「タ（太）」を挙げる（個人名となるため、全体の掲載は控える）。ここでさらに、この後の授業での活動につなげるため、濁点を含む指導学生の姓名については、その

表記の際に、「濁点を省いている」という説明を加えた。児童らにおこなう実技指導の際にも、濁点や半濁点は省いた表記を採用している。

3.2 導入部分の実践

まず、これら①から③を含めた活動を約二十分間、体育館で小学四年生約百人を対象におこなった。児童らが体育館へ入場した際の挨拶や表情により、積極的に参加している様子が十分に感じとれた。その姿勢は終始継続し、クイズ形式の自己紹介がいっそう効果的な結果をもたらした。導入の際に見せた「奈良教育大学仮名書道研究室」の条幅作品（約三十五センチメートル×約三メートル、左から右への横書きとした）に児童らは圧倒されている様子であり、口々に大ききや字形について話していた（図四）。

図四 条幅作品「奈良教育大学仮名書道研究室」を提示する場面



結果をもたらした。導入の際に見せた「奈良教育大学仮名書道研究室」の条幅作品（約三十五センチメートル×約三メートル、左から右への横書きとした）に児童らは圧倒されている様子であり、口々に大ききや字形について話していた（図四）。3.1で挙げた①の活動では、何も説明をせずに文房四宝をそれぞれ見せたところ、児童らが自発的に挙手し、それらの名称を答えていた。すべての場面で九割以上の児童が挙手したため、一人を指名せず、全員一斉に発言させる場面もあった。こちらが圧倒されるほどの熱気に包まれ

図五 軸作品を用いて説明する場面



た。書写を含めた書道について、さらにはそこで用いる用具用材一つ一つについての細やかな教育がなされており、興味をもってこの授業に臨んでいることが明白に見てとれた。

①の最後の紹介では、指導学生による仮名書道の軸作品を披露した。作品を開ける際には歓声があがり、「きれい」「すごい」「かつこいい」という言葉が聞かれた。ここでは発問をするのではなく、

指導学生は本作品を用いて表装や落款印についての説明を加えたが（図五）、児童らは、その一つ一つに感動している様子であった。

次に②を担当するグループが、それぞれの出身地を当てる仮名文字解読のクイズを展開した。やはりここでも文字を提示するとに九割以上の児童が挙手し、発言した。ここでは平仮名に近い平易な造形の仮名文字を用い、毛筆で少し連綿した字形としたため、読みやすいものが多かったようである。しかし、それぞれの地域の関連画像をあわせて示していたため、それに左右される児童も多く、画像から連想する都道府県名や国名を自由に答える場面も多くあった。仮名文字の読みではなく画像による連想ゲームのようになってしまった場面も見られたが、児童と指導学生の親睦が深められるという利点は大きいであった。どうしても正解が出ないものについては、指導学生がヒントを与えていた。直前の①の活動において、スクリー

図六 変体仮名「可」の
説明スライド（部分）



ンや実物を見て、それらが何かを答えていたため、提示された文字ではなく画像（写真や絵）を見て解答するという流れができていたと考えられる。指導学生は、正解が出た後、提示した仮名文字の読みを確認し、仮名文字への意識を持たせる工夫をしていた。

最後に、③では、関連画像なしに、姓名の仮名文字だけを提示したが、ここでも積極的な挙手が見られた。やや難易度が上がったようで、挙手せずに口々に意見を言ったり相談したりする児童も複数おり、悩んでいる様子がうかがえた。とくに「可」については、さすがにすぐに読める児童はいなかった（図六にスライドの一部を示す）。しかし、「可」の説明や仮名文字の説明をするうちに、挙手する児童が増え、柔軟に解説に対応していく様子が見られた。二回目に提示した姓名に含まれる「可」では、先に出したものをふまえて読める児童も複数おり、定着もうかがえた。万葉仮名には非常に興味を示したようで、字源を考え、独自にその読みを導きだし、さらには濁点の発音を含めて解答する児童もいた。③のグループのまとめとして、万葉仮名の説明をくり返し、漢字から仮名文字が生まれたこと、仮名文字の字形が変遷してきたことなどを簡単に紹介し、次の講義内容につないだ。

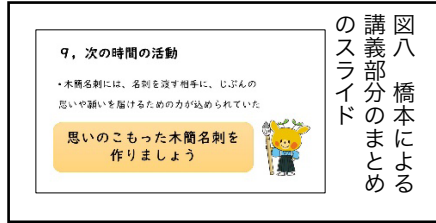
図七 橋本による講義の様子



指導学生による導入を終えてすぐ、橋本による講義に移った（図七）。この講義は二十分程度であった。指導学生らによる復元名刺木簡（勺状のもの）、朝鮮出土『論語』復元木簡（二二〇センチメートルの長さをもつ四面木簡）、復元『論語』竹簡（冊状のもの）などの現物資料に加え、体育館での講義ということで、それらの画像も用意し、講義内容のスライドを大きく提示しながらおこなうこととした。

講義では、まず、紙のなかった昔には、漢字は木に書かれていたことを紹介し、それが木簡と呼ばれること、木簡は荷札などの実用的なもののからやがて特別な意義をもつたものも生まれるようになったこと、日本では長い棒状の形をした木簡が発見されていること（中国では出土例がなく、日本と朝鮮のみ）、名刺も古くは木簡を用い、その形は棒状であったと考えられること、棒状の形に整えた木簡は貴重であり、そこに文字を書くことは特別な行為であったこと、そのため名刺は棒状の木簡に書かれたこと、名刺に「刺」の字が使われているのは木に削るようにして名前を書いたことに由来するとするほかに、棒状の名刺を渡す相手の家の庭に刺したとする説があること、以上について平易に解説をおこなっ

図八 橋本による
講義部分のまとめ
のスライド



た⁽¹⁵⁾。

その後、日本人の名前の表記が万葉仮名から漢字へと変わることを、奈良にゆかりのある蘇我入鹿を例に説明した(図八はその講義で提示した最後のスライド)。

当初、児童に発問をおこなう場面の設定は多くなかったが、導入の流れから、橋本の講義中にも、児童らは積極的に次々と挙手し、さまざまな場面で発言していた。名刺は、小学生にとってはまだなじみのあるものではないが、名刺の特別な機能や変遷を知り、この後おこなう木簡の名刺作成に大きな期待を膨らませている様子が見てとれた。

なお、後日、東登美ヶ丘小学校の児童から届いた振り返りを兼ねた札状にも、この講義内容について触れているものが多く、木簡や名刺の歴史的背景について学びを深め、興味や関心を深めたことが読みとれた。木簡の名刺は家の庭に刺すという話は印象に残ったようで、実際に児童が作った自分の木簡名刺を家の庭に刺してみたを書いてあるものもいくつか見られた。

橋本は漢字の専門家としてこの講義部分を担当し、木簡の歴史と仮名文字の発生までの漢字表記の変遷を話したが、ここでも、次の授業の実技における仮名文字の歴史と木簡の名刺作成へつなげる工夫をおこなうことに重点を置いた。とくに形を整えた木に文字を書

くことは特別なことであることを伝え、思いを込めて書字をするという意識づけをおこない終了した。

3.4 木簡名刺作成の指導内容の工夫

体育館での講義のあとは、三クラスそれぞれの教室に分かれておこなう実技である。体育館での講義内容を受け、指導学生らが仮名文字誕生以降の歴史について話したあと、木簡名刺の作成の実技指導をおこなう。

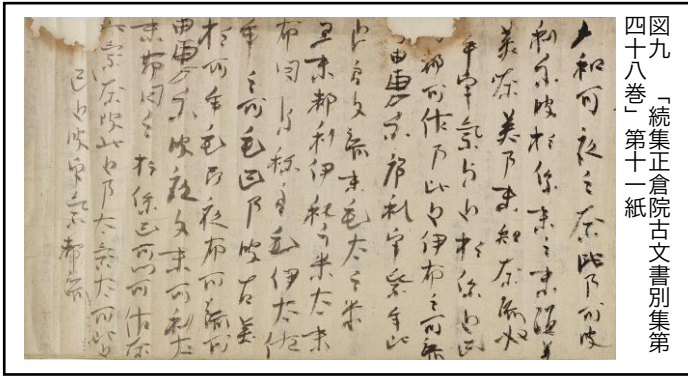
一クラス三十三名または三十四名の学級で、普通教室⁽¹⁶⁾にておこなう。ここでは、できるだけ実物を提示し、情報機器の使用はしないこととした。学生は導入部分の講義時と同様の三グループに分かれ、各クラスを担当する。仮名書道研究室所属の日本人学生は、高等学校芸術科書道の教員免許を取得または取得見込であるが、加えて小学校の教員免許を取得または取得見込の学生や、既に小学校で教壇に立つ経験を有する大学院生もいる。さらに、以上の全員が各種学校での教育実習経験者である。それらの経験を活かし、数名の外国人留学生とのバランスを考慮しながら、グループ編成をおこなっている。

三クラスに分かれての実施であるが、授業内容の統一を図るために指導学生全員での話しあいや、グループごとの代表学生による綿密な打ちあわせをおこなった。学習指導案とまではゆかないが、それに類する授業の流れの計画表も作成し、適宜、指導学生全員が共

有した。

本授業部分は、導入部分を終えて、体育館から移動し、休憩時間をとってから約四十五分間での実施となる。指導学生一人につき児童六名程度の指導を同時にする必要があるのである。そのため、実技に先だつ説明部分がとくに重要となる。

図九 「続集正倉院古文書別集第四十八巻」第十一紙



史については、簡潔に、かつその後に書く仮名文字の理解が深まるような内容とした。男手から草仮名、女手、そして現在の平仮名へ至る歴史を、実際に一文字を取りあげて毛筆で書いたものを提示しながら説明することとした（ただし、ここでは、対象者が小学生であることや時間の都合上、単純に特定の男手が統一的に簡略化されて女手の字形となつたわけではないということには触れない）。字形は「正倉院万葉仮名文書」における

漢字の楷書や行書に近い仮名文字、および「高野切第一種」を基調とし、さらに草仮名は「高野切第三種」や「秋萩帖」を意識した字形とした。もちろん、三グループとも同じ大きさの揭示物を作成した。

ここで、男手について、正倉院文書のうちの「正倉院万葉仮名文書」を基調とした理由について述べる。「正倉院万葉仮名文書」は、宮内庁が保存する正倉院宝物「正倉院文書」の「続集正倉院古文書別集第四十八巻」⁽¹⁷⁾のうち、書状である第十紙と第十一紙を指す。この二種のうち、今回参考とした字形は第十一紙（図九）のものである。これは、男手のみで書かれたものではないが、比較の見やすいことと、連綿等の不要な筆画を多用せず簡略化された素朴な字形であり、平仮名にも似た柔らかな筆画が見られることが選定の理由である。ここから、平仮名へ変遷していくという想像がしやすい字形である。指導対象となる東登美ヶ丘小学校四年生の児童らは、もちろん毛筆を既習であり、小筆の経験もあるため、その柔らかな筆画がとくに難しいということはないと考えた。さらに、今回は、奈良に関する学習をおこなっていることから、児童らに身近な正倉院との関連があることも、選定の大きな理由となつている。なお、本書状を含めた「続集正倉院古文書別集第四十八巻」は、令和元年度「御即位記念 正倉院展」⁽¹⁸⁾においても披露されており、奈良と深い関係があるのみならず、歴史的にも重要で貴重なものである。この「正倉院万葉仮名文書」に使用される文字の筆画は、太さもあり筆勢の強い筆致で書かれる。児童らにも筆画の関係性が見やすく、

また、それほど高度な筆圧の変化を要求しないものでもある。

万葉仮名（男手）から平仮名に至るまでの講義はおこなうが、実際に実技で取り扱う仮名文字については、連綿がない万葉仮名（漢字でいう楷書や行書体）と、連綿が多用でき、かつ字種の豊富な女手に限定することとした。許可を得て事前に児童らの名簿を借り、姓名を万葉仮名と女手で書いた手本を用意しておくこととした。橋本による講義では、古代の名刺木簡には、名前以外にも、出身地や挨拶などを書いていたことにも触れ、そのような木簡名刺作成の実践をおこなったこともあったが、今回は実技指導を十分におこなうため、姓名のみの書字とした。なお、指導学生全員が全児童の姓名を分担して書字したが、書風の統一はもちろん、大きさなどにも配慮し、北山がすべてにわたり実技指導をおこなった。

3.5 木簡名刺作成の実践

体育館から移動し、休憩後に本授業を開始した。本活動においては、指導学生らが講義と実技指導を各教室で担当する。橋本はその様子の撮影を、北山は撮影と指導補助を担当した。ここでは書道用具用材は普段児童らが使用しているものを活用したが、硯は石でできたものを貸し出し、固形墨を磨ることから指導した。

本講義の導入においても、それまでの体育館での活動からつながら、振り返りを含めながら仮名文字の説明をおこなった。実際に、文字の変遷を一文字ごとに掲示（図十）するほか、このたびの

図十 仮名文字の変遷についての講義の様子



連携事業のコーディネーターを務めてくださった東登美ヶ丘小学校教員の姓名を、万葉仮名、草仮名、女手により毛筆で書いたものを提示した。ここでも、各クラスの児童らは積極的に挙手して発言をしていた。その後、実際に作成するための木簡や作品例を提示すると、児童らは自席で身を乗りだして観察する様子うかがえた。木簡は一人につき一つを作成するが、複数の大きさや形がある。そのため、どれに書こうかと考えをめぐらせているようであった。

実技指導の際には、児童の机の配置を、六名程度で向き合うように変え、その各集団につき一名の学生が指導を担当した。三教室、さらに教室内のいくつかの集団で同時に同じ内容をおこなうが、指導学生らがそれぞれに考えた方法で、児童と親睦を深めることも重視しながら進めた。自己紹介、墨の磨り方、用具用材の準備、木簡の選択、手本の選択、練習、清書という流れでそれぞれ指導した。ここで特筆すべきことに、指導学生らが準備してきた児童の姓名の手本を提示した際に、児童らが「きれい」「うまい」「（自分は）こんなに上手に書けない」という内容の発言を多くしていたことがある。ふだんあまり目にしないはずの仮名文字であっても、児童らが見ずからの感性をはたらかせ、美的価値を見出していることに驚

いた。さらに、指導学生らが筆を執って書き方を示すと、感動して歓声をあげる様子もあった。北山も数名の児童らの姓名を書いて見せたが、「すくすくきれい」「なんでそんなに上手に書けるの?」「先生(北山)は、先生たち(指導学生ら)の先生をしているから、もつとうまい」という評価だった。さらにこれらは、結果としての文字に対するものでもあるが、指導者の手の動きに対する評価でもあった。これは書いた文字が万葉仮名でも女手でも同じである。また、万葉仮名と女手は、どちらかに偏ることなく手本として選ばれていたようである。

児童らの集中がとぎれることはなく、ときに口々に感想を言いながら、指導学生の言うことを聞いて練習に励んでいた。何度も何度も半紙に練習し、清書となる木簡に合わせた大きさの字の練習へと移り、最後にそれぞれの集団ごとに清書に取りくんだ。やはり、いざ木簡に書くとなると、児童らは「緊張する」「うまくいくかな」「がんばってみる」と心配したり気合いを入れたりする発言をしていた。後の振り返りにおいても、「はじめはうまくいくか心配だったが、先生に教えてもらい、何度も練習してうまくなった」「練習のおかげで、最後の木簡にはうまく書けた」という内容がいくつも見られた。

指導学生らの計画通りに、時間内に児童らは全員が清書を終え、木簡名刺が完成した。大事そうに机に置いて眺めたり、持ったり、見せあったりしていた。なかには、表面だけではなく裏面にも文字を書いている児童もいた。

振り返りを兼ねた児童らの札状には、この経験を楽しかったと書いているものが多くあった。そして、練習すると書けるようになったことや、書けるようになったことがうれしと感じたことなども書かれていた。また、墨を磨る経験や木に濃く磨った墨で書くという体験は特別であり、その感覚が心地よかったと振り返る児童もいた。

ところで、北山にとって各クラスにおいて印象的であったことは、指導学生らが準備した姓名の手本は、文字をほぼ等間隔で書いていたにもかかわらず、半紙での練習の際に、多くの児童が姓と名の間に他所よりもやや広く余白をとる様子や、連綿をしない様子が見られたことである。伊坂淳一は、仮名文字による文や文章の表記において、意味や文節での書記上の切れ目表示は、「一音一字を原則とする平仮名に本来的に内包されている性質、および墨筆をもって書字するという道具に由来する性質から、自立的に派生してきた、書記にとつてのごくあたりまえの形態である」⁽¹⁹⁾と述べているが、まさに参考とした「正倉院万葉仮名文書」にもそのような跡がうかがえる。児童らも姓と名の字間をやや空け、またそれらを(おそろく意図的に)連綿していない様子から、万葉仮名以来の書記法を自然と体現しているようで、驚かされた。これは、きちんと意味を取りながら(何を書いているのかを自覚しながら)書字をしている証拠である。橋本の講義で意識させた「思いのこもった木簡名刺作成」へ向けた練習がおこなわれていると見なすこともできよう。以上が本実践の内容と成果であるが、ここにはまた、児童らの書字時にお

いて、転回へと向かう直前に実現する芸術的感性と実用的感性共存の萌芽を確認できるのである。

4 仮名文字の教材的可能性

本教育実践において見出すことのできた、書字時の児童らによる姓名間の処理、それにもなう芸術的感性と実用的感性の共存からは、万葉仮名をはじめとする仮名文字が、小筆の教材として有効であることを確認することができた。とりわけ小学校での水書用筆（小筆）の使用開始により、ますます小筆による指導法の整理が必要となっている今、教材の検討も急がれる。そこで、上記の教育実践を踏まえ、以下に、一提案として万葉仮名の教材的可能性を述べる。

4-1 小筆指導に関する研究状況

書写教育に関する研究や実践報告は多くあるが、その多くは硬筆やいわゆる大筆によるものである。加えて、小学校の書写において小筆のみに特化した単元設定はあまりないだろう。それは、大筆より小筆の方が難しいということが要因と考えられる。そのような実状にあるなか、米倉一成は、小学五年生を対象とした平仮名学習指導において、大筆の学習を小筆の学習に結びつけた実践をおこない、そのなかで筆遣いや筆圧について考えさせるとともに、平仮名の字源についても提示した。ここから、平仮名の筆順や字形の意味を考

えさせる活動も取り入れている⁽²⁰⁾。この実践が硬筆指導につながり、学びの定着と実用化が実現するのではないかという理想的な授業である。しかしやはり大筆により得た学びが小筆に活かされるという順序である。

毛筆による書字では一般に、漢字よりも仮名文字の方が複雑な筆画が多く、難しい。例えば、小竹光夫は、平仮名書字時の手指運動を説明するために、指の握力を測定した。そこで明らかになったことのひとつとして、平仮名書字の際には、一部を除いて、握力が強弱を繰り返す、「緊張↓弛緩↓緊張」という書写リズムの構造⁽²¹⁾がおこなわれるという点がある。これは毛筆ではなく測定用の入力ペンを用いているが、書字を習得した者による握力の測定であり、子どもたちが理想とする書き方であると言える。ここから、平仮名は送筆部においてそれだけ手指の力の変化を要するということがわかる。しかし、毛筆であるそれに加えて起筆と収筆の処理が必要となる。大筆では、いわゆる穂先を斜め四十五度とする起筆と収筆（止めの場合）と、一貫した露鋒ができている児童でも、小筆になるとそれらができない場合が多い。小竹によるこの測定に加え、毛筆では起筆と収筆の握力や筆圧の変化が必要となるため、いっそう柔軟な力加減を要することが予測できる。当然、これらの力の変化を多く必要とするほど、子どもたちにとって毛筆による書字は簡単ではなくなる。さらに久米公らは、書写指導の研究において、特定の児童生徒の書字能力獲得過程を、書字過程の諸要素を計測し科学的に解明している。すなわち書字行為に重要とする筆圧と握圧に着

目し、楽に書くための運筆についての言及をしている⁽²²⁾。ここでは硬筆について、適切な文字の大きさの検証を目的としているが、小筆であつても、筆圧と握筆は楽に書くための重要な要素となると考えられる。楽に書くことは、苦手意識を克服させることにおいてとりわけ重要となる。

また、押木秀樹(二〇〇七)らは、書字時における書きやすさを、大学生による書字時の筆圧や速度を計測して検証し、書きやすくなるための要素となる、筆圧、運動量、加速度を数値化している。ここでとくに注目したいのは、折れの動きが曲線化すると、書字時の加速・減速の数値を表すグラフがなめらかとなり、加速度が分散している点である。ここでは行書において折れを曲線化しても、文字の読みやすさや整齊さが損なわれない有効な書字動作となることを立証している。書く際の「動き」に着目した研究の不足を指摘しつつ、この「動き」の学習を中学校における行書の授業などでも重視する必要性を述べている⁽²³⁾。加えて押木(二〇一九)らは、時代ごとの筆記用具の変遷から、「疲労の少ない筆圧はどの程度か」といった研究の蓄積が必要⁽²⁴⁾と考え、緩衝機能付き筆記具による実験をおこない、被験者の起筆・送筆・収筆の特徴の理解を図った⁽²⁵⁾。

これらの研究でも立証されているように、子どもたちにとって握力や筆圧の加減が書字時の困難を左右している。ところで、北山はかつて、小学生の毛筆技能獲得の可能性について論じたことがある⁽²⁵⁾。そこでは小学生の毛筆による行書や草書の書字実践を例として、柔軟な筆圧の変化を加減することが可能であることに加え、運

筆、すなわち書く過程を楽しむことができることについて述べた。これは大筆に関するものではあるが、筆圧の変化を獲得することが可能である点を踏まえると、やはり前述の米倉の実践と同じく、小筆にも応用ができると考えられる。指導法や手本次第で、子どもたちにとつての握力や筆圧の加減における困難は解消が可能と言える。

4.2 「正倉院万葉仮名文書」の教材的可能性

東登美ヶ丘小学校における本実践での使用筆は、小筆のみである。さらに、実際に児童が書く字体および字形は、正倉院文書のうちの「正倉院万葉仮名文書」を基調とした万葉仮名と、「高野切第一種」を基調とした女手である。これらが書写で扱う小筆による字形と大きく異なる点は、起筆であえて進行方向とは異なる向きに穂を置くことや、収筆でも露鋒を保ったまま筆圧や握圧をかける部分が少ないことである。一例として、「正倉院万葉仮名文書」より「タ(太)」と「ノ(乃)」を挙げる(図十一)。「タ(太)」は本稿の実践で、手本においても多用したものであるが、ほどよく余白があり、一画

図十一 「続集正倉院古文書別集第四十八巻」第十一紙より

「太」

「乃」

一画が見やすい。起筆は、一画目は前字からの流れを自然と受けているが、そのほかの起筆は進行方向に近く、穂先が無理な角度ではない。収筆も自然な流れの中で、止めるだけであつたり、

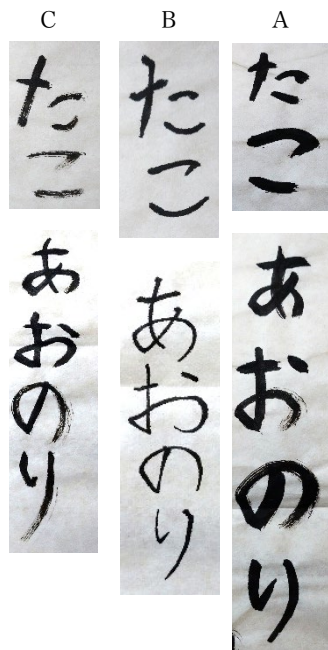
自然と筆を持ちあげたりするような運筆が見られる。「ノ(乃)」は、平仮名の場合は一画であり、筆庄の変化や筆の穂のねじれを伴う回旋の動きがあるが、二画で折れの部分も最小限である。これらを含めた万葉仮名の書字において、児童らが書写の小筆の手本よりもとくに起筆と収筆の処理を自然としている場面が多く見られた。これは、万葉仮名をはじめ、仮名文字が小筆のための教材として有効である可能性を持つことを示唆していよう。このことを実証するために、北山は改めて小学生に「正倉院万葉仮名文書」を用いた実践を試みた。

4.3 「正倉院万葉仮名文書」を教材として用いた実証

北山は、小学四年生二名(A、Bとする)、一年生一名(Cとする)の三名に小筆による書字を依頼した。AとCは、いずれも書道塾に通っているが、小筆の指導は十分に受けていない。まず、小筆による基礎力を確認するため、意味をもつ文字の並びを書字させ、かつ着目したい筆遣いを見るために「たこ」、「あおのり」と平仮名で書かせた。大きさは、半紙作品に書き入れる名前程度で、三名同時に実施した。

見本はなく、学校で習ったように書くよう指示すると、三名とも集中してうまく書く努力をしていた。小筆は大筆を使用するときとは異なり、鉛筆と同じ持ち方をしていた。書かれたものを図十二に挙げる。結果、AとCは、穂先が進行方向に沿った自然な流れであ

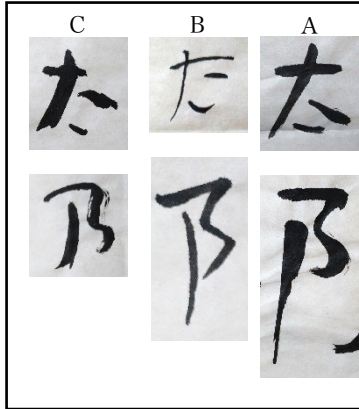
図十二 小学生A・B・Cによる「たこ」、「あおのり」



り、斜め四十五度の起筆を欠いている。一方、Bは、起筆を意識する部分があり、とくに「た」の一画目と二画目で送筆部分に折れができていたり、「の」の起筆後に不自然に筆圧が急に下がったりしているのが見てとれる。また、三名とも、回旋部分やはねでは、筆の穂が広がってしまったり、筆圧が急激に低下したりするなど、不安定になっていることがわかる。

この後、今度は「正倉院万葉仮名文書」の二百パーセントの拡大コピーを見せた。すると、これが昔の日本語(仮名文字)であることに驚いたり不思議がっていたりしたが、一字ずつを説明すると、「おもしろい形」とめいめいに言っていた。特定の文字について、「確かに、これは平仮名になりそう」と形に注目している者もいた。

図十三 小学生A・B・Cによる
「正倉院万葉仮名文書」の「タ
(太)」と「ノ(乃)」の臨書



ち方での筆圧の変化には困難があったものの、書写の文字よりも万葉仮名の方が自然な筆圧・握圧・運筆で書けていることがわかる。起筆と収筆の斜め四十五度の形や折れの際の筆圧の変化が見えない方が、子どもにとっては書きやすいと考えられる。そのほかに書いたものを図十四に、「正倉院万葉仮名文書」の文字と並べて掲載する(Cは「タ(太)」と「ノ(乃)」しか書いていないためここにはない)。

ここで注目すべきは、筆圧や筆遣いの変化である。図十四は、そ

そしてすぐに書かせたものが、図十三である。臨書とまでは説明していないが、「こ」(「正倉院万葉仮名文書」の拡大コピー)のなかで、好きな文字を書いてみて」と指示し、いわゆる「正倉院万葉仮名文書」の臨書をさせた。今度は文字を指定しなかったが、北山が取りあげて説明した「タ(太)」と「ノ(乃)」は三名とも書いていた。もとの字形は、図十一に挙げたが、やはり鉛筆同様の持

れぞれが書いた順に挙げており、その順序は子どもたちが自分で決めたものである。北山は何も指導はしていないが、送筆部分の変化は著しく、長い運動を伴う送筆部分では、自然な変化が表れている。持ち方は鉛筆のときと変わらないが、だんだんスムーズに筆を動かしている様子がうかがえた。
筆圧について、書写では小筆でも一定の筆画の太さが求められるため、毛筆書字に慣れていない子どもへの指導における課題は多い。

図十四 小学生A・Bによる「正倉院万葉仮名文書」の臨書



森哲之は、毛筆硬筆ともにとくに持ち方の指導において「強く濃く書くことを求めすぎること、持ち方の崩れの弊害の一つと考えられる」⁽²⁶⁾と述べるように、一定かつ高い筆圧を求めすぎると、持ち方に加え、図十二で挙げたように、回旋部分やはねの部分での困難が生じる。さらに、書写においては硬筆のための毛筆指導が求められるがゆえに、起筆と収筆において、大筆と同じような動きは難しい。その課題については、例えば、新井こず江は、小筆も「やはり毛筆の持ち方が適しているのではないか」と指摘し、毛筆（大筆）の持ち方によつて小学校一年生と二年生に水書用筆の指導をおこなう検証を課題とした⁽²⁷⁾。確かに、大筆と同じ筆遣いを小筆にも求める段階では、その必要がある。しかし、国語科書写教育における小筆は、硬筆の基礎を習得するためのものであると考えたと、毛筆でのみおこなう起筆と収筆の処理を小筆に応用することや、大筆の持ち方を適用するのは、手段と目的が入れ替わってしまう。やはり鉛筆の持ち方でも毛筆により筆圧や握圧、運筆等の基礎が身につけられるような教材が必要となろう。それに適したものとして、この万葉仮名を挙げることができるのではないだろうか。

おわりに

本稿では、東登美ヶ丘小学校での教育実践を報告・検証し、そこから得られた成果として、小学校児童らの書字時における姓名間の

処理に注目した。平仮名は筆画の変化が多いことにより、とくに書字が難しいとされる。本稿では、東登美ヶ丘小学校での実践に加え、他所での小学生への実践からも、「正倉院万葉仮名文書」を教材とすることで、その難しさを克服させる可能性を見出すことができた。そこで、この「正倉院万葉仮名文書」を教材とすることを提案し、あわせて、漢字からできた仮名文字が、子どもたちの平仮名書字への橋渡しとなることを期待したい。そのためにも、今後は小筆指導について、実践を踏まえて検証を続けたい。

注

(1) 北山聡佳・橋本昭典「『書道の芸術性と実用性』初探―『墨書四面木簡』の制作から―」(『奈良国立大学機構連携教育開発センター紀要 第一号』二〇二三年、三九―四六頁)

(2) 奈良製墨組合ウェブサイト

URL: <http://www.sumi-hara.or.jp/index.html> (最終閲覧日二〇二三年十一月二十二日)

(3) 現行の小学校国語科書写用教科書(書名および発行者)は、次の通り。各社とも第一学年用から第六学年用まで六種あり、二〇一九年に教科書検定に合格、二〇二〇年二月に発行している。

『新しい書写』東京書籍、『みんなと学ぶ小学校書写』学校図書、『小学書写』教育出版、『書写』光村図書出版、『小学書

写』日本文教出版（文部科学省「小学校用教科書目録 令和五年度使用」（二〇二二年四月）掲載順 文部科学省ホームページURL
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kyoukasho/mext_0004.html（最終閲覧日 二〇二四年一月三日）

- (4) 渡部清ほか著『みんなと学ぶ小学校書写 三年』（学校図書、二〇二〇年）一五頁
- (5) 加藤祐司・長野秀章ほか著『小学書写 五年』（教育出版、二〇二〇年）五三頁
- (6) 宮澤正明ほか著『書写 四年』（光村図書出版、二〇二〇年）五三頁
- (7) 平形精逸ほか著『新しい書写 三』（東京書籍、二〇二〇年）二二頁
- (8) 前掲(7) 五七頁
- (9) 渡部清ほか著『みんなと学ぶ小学校しよしや 二年』（学校図書、二〇二〇年）三六頁
- (10) 前掲(4) 三三頁
- (11) 加藤祐司ほか著『小学書写 六年』（教育出版、二〇二〇年）一頁には、出典不記載だが『竹取物語』の写本（部分）があり、同図版が、平形精逸ほか著『新しい書写 六』（東京書籍、二〇二〇年）三九頁にも見られる。同著には、五三頁に、豊臣秀吉による仮名文字の書状も掲載される。そのほか、『源氏物語』および『万葉集』の写本（部分）が、宮澤正明ほか著『書写 六

年』（光村図書、二〇二〇年）二七頁にある。歌碑については、渡部清ほか著『みんなと学ぶ小学校書写 四年』（学校図書、二〇二〇年）四九頁に若山牧水の仮名文字による歌碑が掲載される。

- (12) 池田利広・萱のり子ほか著『小学書写 五年』（日本文教出版、二〇二〇年）二三頁

(13) なお、東登美ヶ丘小学校では日本文教出版の教科書を使用している。また、同校では、今回の本学との連携以外に、奈良墨工房・錦光園の協力を得て、墨遊び（墨で大きな紙に書く体験）や握り墨体験など、墨を用いた実践と製墨職人の講義を通じた学習をしている。同校は、まさに地域に根付いた伝統産業を学ぶにふさわしい環境にあると言える。

- (14) 本文書は、例えば小松茂美は「万葉仮名文書」（『かな』岩波書店、一九六八年、四八頁）と言っている。堀江知彦は『日本の美術第一三〇号かな』（至文堂、一九七七年、一四頁）にて「正倉院仮名文書」や「万葉仮名文書」と言い、春名好重は『古筆大辞典』（淡交社、一九七九年、一一一六頁）において「万葉仮名文書（まんようがなぶんしょ）」としている。
- 一方、現行の小学校国語科書写の教科書では、光村図書による『書写 六年』（宮澤正明ら著、二〇二二年発行）にのみ本文書の図版とキャプションが掲載され、そこには「正倉院万葉仮名文書」とある（二九頁）。本稿ではこの「正倉院万葉仮名文書」と呼ぶこととする。他に、中学校書写の現行教科書には見

られないが、高等学校芸術科書道の現行教科書では、石飛博光ほか著『書道Ⅰ』（東京書籍、二〇二二年）には「正倉院仮名文書」（七六頁）、澤田雅弘ほか著『書道Ⅰ』（教育図書、二〇二二年）には「正倉院万葉仮名文書」（六五頁）、高木聖雨ほか著『書Ⅰ』（光村図書、二〇二二年）には「正倉院仮名文書」（七八頁）とある。これらの図版は、いずれも、正倉院宝物「正倉院文書」の「続集正倉院古文書別集第四十八巻」のうち第十一紙の図版の部分である。

(15) 詳しくは、前掲(一) 参照

(16) 三教室は隣接しており、各教室に一人一つの可動式の机がある。廊下には児童が使用できる複数の水道が設置されている。

(17) 宮内庁ホームページ「正倉院紹介」「続修別集 第48巻 造鏡様 他」
<https://shosoin.kunaicho.go.jp/treasures?tid=0000011246&index=0> (最終閲覧日 二〇二四年一月三日) 参照

(18) 「御即位記念 第七十一回正倉院展」奈良国立博物館主催、二〇一九年十月二十六日から十一月十四日に開催

(19) 伊坂淳一「仮名文の表記原理への軌跡」(『千葉大学教育学部研究紀要』第五三巻、二〇〇五年、四四九-四五四頁) 四五三頁

(20) 米倉一成「文字に対する理解を深める小学校書写学習授業に關する一考察—小学校五年生平仮名学習指導実践記録をもとに—」(『書写書道教育研究』第二十三号、全国大学書写書道教育学会、二〇〇八年、八〇-九〇頁)

(21) 小竹光夫「平仮名の基本となる線や運動の觀察と分析」(『書写書道教育研究』第十一号、全国大学書写書道教育学会、一九九七年、三七-四六頁)

(22) 久米公・小竹光夫・竹之内浩章「筆圧・握圧測定による書写指導の研究(4)」(『国語科教育』二十九号、一九八二年、三一-三八頁)

(23) 押木秀樹・清水陽一郎「書字における書きやすさの重要性和書字動作に關する基礎的研究」(『書写書道教育研究』第二十一号、二〇〇七年、四八-五七頁)

(24) 押木秀樹・辻遠汰「書字における筆圧の影響と筆記具による改善の可能性」(『書写書道教育研究』第三十三号、二〇一九年、四一-五〇頁)

(25) 北山聡佳「書写書道とESD—水書用筆の登場」(『学校教育におけるSDGs・ESDの理論と実践』奈良教育大学ESD書籍編集委員会、二〇二一年三月、一三三-一三六頁)

(26) 森哲之「書写に關する幼小接続の指導支援と水書用筆等の活用—就学前における書道教室2019・2020の実践を中心に—」(『広島文教教育』第三十五号、二〇二〇年、五九-六七頁) 六二頁

(27) 新井こず江「水書用筆」を用いた運筆指導に關する一考察」(『信大國語教育』卷二十九号、二〇一九年、四四-五五頁) 五四頁

図版典拠

図一・図八 稿者作成

図二・図三・図六 奈良教育大学仮名書道研究室所属学生作成

図四・図五・図七・図十 稿者撮影

図九 奈良国立博物館編『第七十一回「正倉院展」目録(令和元年)』

(仏教美術協会、二〇一九年) 一〇五頁

図十一 図九の部分(稿者による編集)

図十二・図十三 小学生による文字より稿者作成

図十四 図九および小学生による文字より稿者作成

〔付記〕本稿のきっかけとなった教育現場での実践は、奈良市立東登美ヶ丘小学校の先生方のご尽力により、実現することができた。同校児童のみなさんも、積極的な姿勢で取り組んでくれたことが印象深い。あわせてここに謝意を表したい。

(本学美術教育講座)
(本学国語教育講座)